

(2)平成17年度科学研究費補助金 系・分野・分科・細目表の別表 時限付き分科細目表

分 野	内 容	細目番号	設定期間
表 象 芸 術	<p>図像学やデザイン学、ポスター、映画、ビデオといった従来の美学が扱わなかったような分野に限らず、舞踏、演劇や伝統芸能、さまざまなパフォーマンス等の身体芸術、造形としての陶芸やオブジェ芸術、デザイン工学も含め、表象芸術と呼びうるものの発達は近年著しく、今後もより一層展開してゆくであろう。</p> <p>表象芸術という分野は、今後さらに発展する可能性を持っており、かつ人々に与える影響の大きさを考えるとき、この分野の研究を推進することが重要である。</p> <p>この分野はこれまで「美学」に含まれていたが、「美学」とは独立した細目を立てることによって、この分野の展開を図る。</p>	9005	平成15年度 ～ 平成17年度
都 市	<p>都市には地球人口の70%以上が住んでいる。人間諸活動の空間的な場としての「都市」が、今日までどのような歴史を歩み、今後どのように変容して行くか、またどのように変容しなければならぬか、そして固有の諸条件に従いながら、如何に既存都市を変容させ、各々の固有の諸条件に合った新しい都市を形成してゆくべきか、そして都市においてどのように人間諸活動を営むべきかについて、多面的な研究の展開を期待する。</p>	9011	
「総合的な学習」 のカリキュラム開発	<p>平成10年に告示された学習指導要領において創設された小学校3学年から高等学校までの「総合的な学習の時間」は、各教科とは独立して設定されており、学習指導要領には教科の場合のような目標・内容等は示されていない。各学校が創意工夫をこらして企画・実践をすることが求められている。このため、既存の「教科教育学」の細目では扱いにくい面がある。したがって、独立に細目を設定することにより、学習指導要領が例示しているような、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童・生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題にかかわる学習のためのカリキュラム開発についての実践的・臨床的研究が期待される。</p>	9012	
人 工 感 覚	<p>高齢化社会への進展に伴い、立位や平衡などの体位感覚や五感に障害をもつ高齢者が増えつつある。また、若年者においても事故や病気が原因でそれらの感覚に障害を持つ人も多数存在する。一方、一般人の豊かな生活を支える科学技術分野、産業応用分野などにも、人工感覚の必要性が高まっている。</p> <p>近年の電子・情報技術、特にセンシング技術や信号処理技術は大きく発展しており、高性能な味覚センサ、臭いセンサ、応力・歪センサなどが登場しつつあり、人工センサの理論的研究並びにシステム化技術が必要になっている。</p> <p>感覚機能を人工的に補いクオリティライフの向上を図るため、電子情報技術と医療技術の融合を目的として、人工センサの理論的・応用的研究の発展を期待する。</p>	9013	平成16年度 ～ 平成17年度
食 の 安 全	<p>近時、必ずしも安全ではない食料がグローバルに流通するようになった。国民に安寧な生活を保障するために、食に関連したリスクを管理し、評価する研究と食料の安全性についての正確かつ強力な科学的根拠を提供することが求められている。食料が農場から食卓、更には体内にまで至る流通経路・代謝過程の中で、人体に危害をもたらす可能性のある要因を科学的に解析し、その危害の予防法や排除技術の開発に資する科学的根拠を構築することを目標とした研究が望まれる。</p> <p>健康被害をもたらす病原体、内因性及び外因性有害物質の検出とそれらによる危害阻止に資する技術やシステムの開発、病原生物の安全性評価、病原生物の薬剤抵抗性・感受性の評価、内因性及び外来性物質の安全性評価、安全性評価手法の開発、食品の取扱法・輸送法・貯蔵法に関する研究を行うとともに、食源性プリオン病治療予防に資するために、モデル系を利用したプリオンの異常プリオンへの転換過程の解明等を期待する。</p>	9014	
睡 眠 学	<p>睡眠研究の進展は顕著であるが、まだ不明の領域も多く、睡眠機構や睡眠の生理学的意義の真の解明は今後の課題となっている。また、不眠、過眠等の睡眠障害に悩む多くの患者を生むと同時に睡眠障害による社会問題も発生している。そこで、本領域では睡眠を司る神経生理学的基盤の解明、睡眠制御の分子基盤の解明を推進して睡眠の基本的理解に迫る。また、睡眠異常に関する臨床的研究、薬物の睡眠への影響、薬理作用等についても研究し、睡眠障害の克服を目指す。これらの研究領域が相互に関連する細目として「睡眠学」という共通の分科細目を独立して設定することにより、睡眠に関する総合的な研究の展開を図る。</p>	9015	
臨 床 疫 学	<p>わが国の分子生物学的手法を用いたDOR(Disease Oriented Research)は近年著しく発展した。しかしながら、同時にヒトを対象としたPOR(Patient Oriented Research)は、欧米と比較して立ち遅れている。</p> <p>臨床疫学研究は、このPORの根幹をなすものであり、医学研究を患者及び患者診断に立脚した医学の原点に立ち戻らせる研究の流れである。</p> <p>複数の治療選択肢の中から、自分に最適な治療を望む患者にとって、生命予後や客観的な事実(アウトカム)を用いた科学的証拠(エビデンス)だけでは充分ではない。むしろ、慢性疾患により制限される日常生活機能や社会生活機能なども重要な関心事であり、実際の診療選択においては、これらの事実も視野に入れた科学的証拠が求められる。臨床疫学研究は、従来の疫学研究では用いらなかった患者に立脚した事実を積極的に活用することが特徴であり、効率的な診断・治療方法の選択に際して科学的な根拠を与えるものである。</p>	9016	

分野	内 容	細目番号	設定期間
ア レ ル ギ ー	<p>今や国民の3割近くが何らかのアレルギー疾患に悩まされていると言われ、大きな社会問題となっている。「アレルギー」のキーワードは、内科系臨床医学の「膠原病・アレルギー・感染症内科学」等にみられるが、臨床的観点からアレルギー疾患を研究するという側面が強く、必ずしも基礎免疫学的なアプローチでアレルギー病態の解析がなされているとはいえない。一方、基礎医学の細目「免疫学」は非常に広範囲な免疫研究をカバーしており、アレルギー研究の採択は非常に少ない。このような現状を鑑みて、臨床アレルギー学、基礎免疫学の枠を越えて、薬学、獣医学、生物学など広い分野の研究者の緊密な連帯を促し、アレルギーの病態の解明を目指す。</p>	9017	平成16年度 ～ 平成17年度
廃 棄 物 シ ス テ ム	<p>廃棄物処理・循環システムは、人間の営みに不可欠であり、法システム、社会システム、人間の行動様式の分析等の人文社会系研究分野と、技術的システム開発等の理工系・生物系研究分野が関わる研究課題である。例えば、廃棄物問題の解決には技術的制御と経済的制御に加え、行動科学や社会心理学などからのアプローチが不可欠である。分野に分かれた個別の研究ではなく、異なる分野の研究者が有機的に結びついた、連携・横断型の総合的な取り組みにより、実社会に適用可能な成果を期待する。</p>	9018	
社 会 開 発 と 文 化	<p>発展途上国における開発の現場は、過去20年間に大きな変貌を遂げた。経済成長、治安維持等を第一義とする現地自生的な社会開発の理念は後退し、国際協調に基づき、現地の状況に即応した開発モデルとその実践が現在試みられている。この傾向は、武力紛争や大災害後の緊急支援活動(=迅速性・柔軟性)、国際的経済協調を背景とする地域開発計画(=グローバル性)、ジェンダーや持続的開発に配慮した地域住民志向の小規模社会開発(=文化的感受性)という3つの領域でとりわけ顕著である。</p> <p>欧米ではこの分野に関する応用開発人類学の強い伝統があるのに対し、我が国の研究は、先駆的で萌芽的な諸研究がさまざまな分野で生まれているとはいえ、いまだ端緒にすぎない。開発および開発に対する国際協力の社会・文化的側面の研究、開発に伴う地域伝統・危機言語・少数言語の保護と変容に関する研究、「社会正義」など開発の価値と倫理に関する研究、国際協力における文化人類学の実践的成果利用に関する研究などの研究を奨励し、交流と統合を促進することが望まれる。</p>	9019	平成17年度 ～
人 材 育 成 と 技 術 者 倫 理	<p>科学技術の分野に参入する若い優秀な人材を確保し、独創的な技術を創出する人材の育成が重要な課題となっている。また、科学技術の高度な発展により、従来は考えられなかったような事故が頻発するとともに、技術者倫理の未確立や技術者倫理教育の未浸透等を原因として、技術者倫理に反するような行為が目立つようになり、技術者・技能者の高度な倫理観の確立が必要になっている。すなわち、国民の間で広がっている技術の安全に関する危惧の念を払拭するための抜本的方策が必要である。</p> <p>国際的には技術者資格の取得・更新には継続教育が必須条件とされ、その中でも技術者倫理の重要性が認識されており、技術者・技能者の能力開発とその方法、継続教育(CPD)の方法、事故および技術的失敗例の分析とその防止策、技術者倫理に関する事例分析と教育、技術・技能および伝統意識の継承などの研究を進める。</p>	9020	平成18年度
極 限 環 境 生 物 学	<p>極限環境、すなわち超高温・超低温、超高压、強酸・強アルカリ、高塩濃度、乾燥、強放射線照射下など、極めて特殊な条件下でも生存し増殖する生物(極限環境生物)が多数存在することが知られている。</p> <p>約38億年前に誕生した原始生命はアーケア・ユーカリアの起源となる生物とバクテリアの起源となる生物に分かれ、独立に進化した。特に好熱性アーケア・ユーカリアの起源に相当する微生物が、地球の様々な極限環境に適応しながら生存圏を広げていき、アーケアとなり、また一方で好気呼吸機能を獲得したバクテリアの共生を受け原始真核生物(ユーカリア)へと進化した可能性が高い。極限環境下の生命誕生、真核生物への進化、および極限環境に対する適応戦略を、細胞生物学、分子生物学、生態学、生理学等の様々な視点から研究することによって、生物の進化や環境適応機構といった生物学における重要課題に対する知見が蓄積できる。さらに、当分野の研究によって得られる知見は、極限生物が生成する種々の酵素をはじめバイオテクノロジーの様々な分野で応用され、今後も多方面へ発展することが期待される。</p>	9021	

(注1) この表は、本表と併せて基盤研究(C)(審査区分「一般」)についてのみ適用されるものです。
(注2) 設定期間は公募を行う年度です。設定期間にかかわらず2～4年間の研究課題を対象とします。